

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 上越教育大学附属中学校・校長

氏 名 杉本 知之

研究期間 令和4年度～令和5年度

研究プロジェクトの名称	A I 時代を主体的・共創的に生き抜く生徒の育成 ー自己調整、創造性、人間性に着目してー
研究プロジェクトの概要	<p>知能をもつロボット、I o T、A Rなどに囲まれ、世の中が加速度的に変化する現在の中で、生徒たちは新型コロナウイルスの感染拡大や大国による隣国への侵攻など、数年前には予想もできなかった現在や、今後の予想もできない未来も含めて、本研究ではA I 時代と呼ぶ。コロナ禍以前から、これからの時代は更なる科学技術の進歩により、知能をもつロボット、I o T、A Rなどに囲まれ、Society 5.0の社会が訪れると言われてきた。一方、加速度的に変化する社会の中で、先行きの予測が困難な状況も多くなり、自分自身で生き方をデザインしなければならない時代になるとも予想されてきた。そのような時代においては、学生時代のみならず、生涯を通じて学び続ける意欲や学び方を身に付けた人を育てること、すなわち、「自己調整」できる人材の育成がより一層求められる。また、多くの仕事がA Iに代替される中で、A Iには代替不可能な人間としての強みである「創造性」や「人間性」がより重要視される時代となる。</p> <p>2020年に入り、新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大により、G I G Aスクール構想が前倒しされ、教育を取り巻く状況が大きく変化した。予想もできない状況や変化を的確に受け止め、多様な他者と協働しながらよりよい社会を創造することや、学び続ける意欲をもち、見通しをもって粘り強くやり抜こうとする人材が、ますます求められるようになってきたのである。</p> <p>以上を踏まえ、A I時代において、人間としての強みである「創造性」や「人間性」を生かし、学び方を身に付けて「自己調整」しながら課題解決を図る人材が今後より一層求められるであろうと考え、本研究に取り組むことにした。</p> <p>1 研究仮説</p> <div data-bbox="533 1554 1441 1742" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>各教科等の見方・考え方に加え、「自己調整」、「創造性」、「人間性」に着目して、教科の本質に迫る学びを教育課程全体で展開することにより、生徒は、A I時代を主体的・共創的に生き抜く姿となっていこう。</p> </div> <p>2 研究方法</p> <p>本研究の実践を進めるにあたり、各教科、特別活動、道徳科、T & Qなど、教育課程全体で研究仮説に迫るために以下の五つの手立てを設定し、実践・検証する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 未来志向・解が一つではない教材（題材）の開発 (2) 多様な価値観をもつ人々と接したり対話したりする活動の場の設定 (3) 自己調整を促す学習過程等の工夫 (4) 振り返りの場面の設定 (5) I C T機器の活用

研究成果の概要

1 各教科等で大切にしたい「人間性」の明確化

当校では、「人間性」を「道徳性、社会性、感性などの人間としての強みを生かそうとする」と定義している。第3年次までの「創造性」や「自己調整」に着目した実践を重ねる中で、当校が定義する「人間性」を発揮していると思われる生徒の姿が見られた。それらの姿や目指す姿から、「AI時代を主体的・共創的に生き抜く生徒」を育成するために、各教科等で大切にしたい「人間性」を明確にした。これらは、第3年次までの実践において、生徒の姿や成果物、自己調整振り返りシートの記述などから、当校の定義する「主体的」、「共創的」という観点に沿って抽出したものである。第4年次は、各教科等で大切にしたい「人間性」に着目し、生徒が各教科等の見方・考え方を働かせて教科の本質に迫れるよう、パフォーマンス課題や自己調整振り返りシートに工夫を加えた。

2 「人間性」に着目したパフォーマンス課題の設定

第3年次で共通理解を図ったパフォーマンス課題を継続して設定し、各教科等で大切にしたい「人間性」を生徒が発揮して教科の本質に迫ることができるよう、提示する課題の内容、学習形態、手立て等を各教科等の特質や生徒の実態に応じて工夫した。「自己調整」や「創造性」に加えて、「人間性」に着目したパフォーマンス課題を全ての教科等で設定し、手立てを工夫したことで、生徒は各教科等で大切にしたい「人間性」を発揮して教科の本質に迫ることができた。

3 自己調整振り返りシートの工夫と活用

第4年次は、パフォーマンス課題に対して、生徒が「自己調整」のスキルをサイクルとして回し、「創造性」や「人間性」を発揮して課題を解決していけるよう、自己調整振り返りシートに以下の工夫を加え、活用した。

(1)自己調整振り返りシートのデジタル化

生徒がルーブリックにある到達目標を意識しながら、「自己調整」のスキルをサイクルとして回して効果的に学びを深めていけるよう、自己調整振り返りシートをデジタル化し、全ての教科等で活用した。

(2)ルーブリックに照らした自己評価欄の設定

単元全体の振り返りとして、これまでの「課題解決までの道のり」欄に加え、ルーブリックに照らし合わせて自己評価を行い、評価の理由を記述する欄を設けた。これにより、生徒はパフォーマンス課題に取り組むことで、どのような資質・能力が高まったか、何が足りなかったか等をメタ認知し、今後の学びや生活に向けて新たな目標を設定するなど、学び方としての「自己調整」を身に付けることができた。

4 研究全体評価

「自己調整」、「創造性」、「人間性」に着目して、手立てを講じながら教科の本質に迫る学びを教育課程全体で展開して「AI時代を主体的・共創的に生き抜く生徒」を育成することの有効性を、以下の方法で評価した。

(1)各教科等のパフォーマンス課題の設定と自己調整振り返りシートの記述

(2)NRT、NINO、AAI、全国学力・学習状況調査

(3)研究評価アンケートと抽出生徒へのインタビュー

<p>研究成果の発表状況 (※今後の予定も含む。)</p>	<p>〈公開授業〉</p> <p>令和4年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者協力者打合せ（2022年4月25日） ・指導者協力者打合せ（2022年6月～7月） ・指導者協力者打合せ（2022年9月） ・教育研究協議会（2022年10月17日～20日）※オンライン ・指導者協力者打合せ（2023年2月17日）※オンライン <p>令和5年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者協力者打合せ（2023年8月3日） ・指導者協力者打合せ（2023年9月～10月） ・教育研究協議会（2023年10月21日） ・指導者協力者打合せ（2024年2月13日） <p>〈出版物〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究紀要2022 ・実践のまとめ2023 <p>〈論文掲載予定〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『『令和の日本型学校教育』を具現化する教育活動の実践研究 －ICTを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実践と考察－』日本教育大学協会研究年報・第41集、2024年（印刷中）、査読有
<p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>	<p>2020年2月、新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大により、学校は長期的な休業を余儀なくされ、従前の学校教育は根底から揺さぶられる事態に陥った。学校生活が再開した後も、感染症は収束する見通しは立たず、相次ぐ行事の中止や、三密を回避した教育活動は子供たちに多くの制約をもたらした。2019年に立ち上げた本研究も、教育活動の停滞を受けて教育課程の見直しを図り、当初は3か年計画であったところを4か年計画に修正し、様々な制約の中で暗中模索を続けながら進めてきた。</p> <p>このような中、2021年1月、中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）が公表された。答申の第I部総論では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、Society5.0の到来・新型コロナウイルス感染拡大など先行き不透明な時代であるという時代認識を示した上で、「多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等を育むことも重要である」と述べられている。このことは、コロナ禍の中、当校が試行錯誤しながら進めてきた4年間の研究内容と大きく重なり、教育課程全体で手立てを講じながら実践を重ね、成果と課題をまとめた本研究は、「令和の日本型学校教育」の先行事例として、一つの指針を示し得たのではないかと自負している。</p>